# 海の鳴る時

泉鏡花作

全一卷

叔母の家に急用があつて、故郷から六里來た。此處までは小松、動橋、大聖寺、牛首等を經て、越前に通ずる加賀の本街道で、これから田圃路を一里半、開發といふ山を一ツ越すと、辰の口と言つて温泉があつて、叔母なる人は其處に居る。

急ぎのことだし、呼吸もつかずにとあせつたけれども、北國の冬日和、途中から雪が降出したのに、風が加はり、次第に烈しく、荒れに荒れて吹雪となつた。

殊に今渡つたのは、粟生の橋と名づける、名にし負ふ北陸道七大川の随一たる手取川に架した三百七十幾間といふ凄じいのに白山颪で、天は一面灰汁色で一掴の雲の形の遮るさへなく吹抜けの、鐵のやうに冷切つた橋の欄干に縋り／＼、漸々吹倒されるのを免れて蹌踉けながら越した。

手足は凍える、膚も固くなつて窘んだ處へ、又一

當、颯と渦いて來る雪の輪の中へ、身體が入ると、思はず、くる／＼と廻つた。

ほツ、といふ引呼吸。目當の腰障子を突外すが如くにして飛込んだのは、粟生といふ寒村の中ほどに、豆腐と茸の汁、鰈の干物なぞで、晝食をしたゝめさせる茶店である。

叔母の許に行く都度は、必ず此店で休むので、知己の親仁は、婆が丹精した繼はぎの、糊の硬い、綿の厚い、ごつ／＼とした、寝ン寝子半纏を被て爐縁に蹲つて居た。

「やあ、ござらつせえ。」

「酷い風だ。」と其まゝぴつたり戸を鎖したが、咄嗟に吹込んだ雪は、斑々として土間に散つた。肩を窘めて身震をして、袖を拂くと着た綿を脱いだやうな我が姿。

「驚いた、驚いたな。何うだらう、爺さん、此雪は。」

「いやもう豪いこつちやで。嫁はお前様今朝のこと、隣村へ用達に出掛けましたが、風の凪ぐのを待つてると見えて未だ歸りません。婆あ殿は腰氣で寝て居りますで、お構ひは申されませぬけれど、まあ、

ゆツくりと休まつしやい。お前様、其の裳を下しなさつて、乾かしたが可かんべいてや。」

「今日は然うしちやあ居られない、些と急ぐんだから、爺さん許へも寄るのは歸途にと思つたんだが、何しろ堪らないから駈込んだ。お蔭で助かつた。」

一榾燃す内も身震の出る感じやう。

「あゝ、寒さは寒し。何うも橋の上ぢや雪女郎にしめ殺されようとした。」

兩手で顔を撫でゝ吻と溜息をすると纔に人心地。爺は澁茶を汲んで出して、

「其代にやあお前様、何だよ、辰の口へ行かつしやりや、叔母様が又抱いて寝て暖めさつしやるべい。」

「馬鹿をいへ、僕はもう二十だぜ。」

「いんにやよ。それでもの、未だ小兒だと思つてござらつしやるてや。尤も私が目には嬰兒だ。」

「生意氣をいふぜ、爺さん。」

「何、威張つても埒あ明かねえ。これ、お前様が、母様の膝から下りて色の白い嬰兒でよ、此處等這つて歩行かつしたのを、」

と言ひかけて北叟笑みながら左の目へ指をして、

「ちやんと睨んでる爺様ぢや、早や其時分はぢいさ可愛らしい兒だつけが、褌をしめたか憎らしくなりをつたい。」

「可いから打棄つて措け、叔母さんが可愛がらあ。」

「はゝはゝ、其處ぢや、其處が可愛くてならぬげな。喜造も辰の口へ仕事に行く度、お前様の叔母様が然う言はつしやるとの、彼は幾歳になつても、私には小兒のやうぢやツてよ。」

「分りました。……そして、喜造どんは居ないのかい。家から乘つて來たのは、此吹雪で曳切れないツて、橋向うで斷るし、もう草臥て了つたから一番、辰の口まで御苦勞をかけたいがね。」

「彼はお前様、生憎でござります。昨夜お客様で丁ど其辰の口へ參りましたが、歸りを待つたか、泊りました。此鹽梅ぢや、俥が埋んで、空手で歸らうも知れませぬ。」

「困るな、爺さん、急に歇みさうもあるまいか。」

「然れば。」

戸を引開ける元氣も失せた、屋根裏を仰ぎ、戸口を見返り屹となつて伺へば、深々として、重いものが一面に、唯この宇宙を壓さへる氣勢。盛んに爐にくべた榾の炎尖も上らず、白晝といふのに、火の色も鮮明ならず、樺色に黒味を帶びて下伏に消えかゝり、且つ燃えて居る。内は暗く、戸の外は、野も山も今渡つた橋も眞白であらう。白山颪は地をながれて、此邊は急に靜になつた、が、北海を荒すと見える、遙に耳の底に轟々と響くは其音。

此の海鳴の聞ゆる中から、分れて、又別に・・・・・・轟と響くのが聞取られて次第に近づく・・・・・打傾けば、重々しく、俥の轆轤として來るのである。

「俥が來たよ。」

「や、北の方から・・・・・」

はた／／と煽る戸の外に、ばさり／／と觸れて、雪を踏みしだく跫音、人聲。

「お客様、此處でござります。」

「や、悴が戻つて參りました。やい、喜造か、やい。」と老の膝を立てゝ向直る。

之に答ふる遑さへ無く、急がはしげに戸を開けたが、及腰に敷居を跨いで、喜造は緋の裏の飜れて見ゆる、處雪のかゝつた金釦の厳しい外套に、ふつくり包んだ物を、兩手で、胸の處へ抱きながら、踏張つて、うむと、どツこいしよう！

背後に續いて、帽を目深に、鼻筋の通つた口許のしまつた、年紀は二十四五で、中肉中脊といつたのが、俯向きながら、呼吸を白うして急いで入つた。戸外に着けたのは一輌の俥、今、刎上げて疊んだ母衣から、雪はほた／＼落ちて、未だ歇みさうな様子はない。

些と見て、其の蹴込に積んだ客の荷物であらうと思つた、喜造が手なる外套に包んだのは、片頬見えて身を横に、目を塞いだ美人である。

「こりや！

何うぢやい。」と、爺は口を開いて目を▬る。

「おゝ、若旦那。」

「病人か。」と予は身を開いて居直つた。

「重くはないか。危いよ。」……聞くさへ何となく深切な、優しい聲を懸けたのは旅客である。

「否、大丈夫で、未だ柔かい内だから扱好うござ

いまさ。父さん、うんと藁を焼いてくんねえ、いや、どつこいしよ。」

と爐の縁に舁据ゑると、がつくり、仰向けになつた、黒髪は銀杏返の根が弛んで、筵へ颯と崩れたのである。

「お絹！」と思はず聲を立てた、此の女は温泉の旅籠屋廻りをして暮す、按摩玄達の養女である。

「え、お絹さんなんで。此女ツたら、飛んでもない。おい、父さん、焦げる位が可いぜ。もう、お客様御心配にやあ及びません。何ね、冷え切つた處へ氣が弛んだ所為でさ。いゝえ、吹雪の酷い時や、何うして、熊と取組みさうなのが、此通りなんです。へい、お父さん、どん／＼燒いてくんねえ、まあ、お暖んなさいまし。」

「何うぞ。」

「失禮、」といつて、さしむかひに爐を擁した、旅客は美人の容體を危んで目も放さず、

「一寸、何、醫師は頼まれないかい。」

「お前様、御心配にやあ及びましねえ、私も心得がござりますーー悴、悴、まあ、一體こりや？」

「うむ、聞きねえ、お客様は唯御迷惑を遊ばす譯

だ。此女は可哀相よ。良くねえのは玄達だ。彼のどめくらめ、名代の、ねえ、若旦那。」

答ふる迄もなく、予は唯頷いたのである。

「でございませう。彼畜生、口の臭えほど、腹が汚えからね。譬ひ養女だつて、何だつて、汝にやあお主筋のお嬢さんだ。其を何と、生肉を削つて骨までしやぶらうてえ因業なんだからね。御存じの通、非道なことをするなあ評判でさ。

此のお客様は、何がなし、昨夜あの松屋へお泊り遊ばしたんです。すると、ほら御承知の玄達め、又女中に握らして、帳場の女房にや内々で、此女をお給仕に出したんでさ。何時か縣知事様のお目に留まつたと言つて、一時騒いだんでせう。憚りながら舊は三千石のお嬢様だ。此位な容色は澤山はありませんぜ。分けてあんな温泉になんぞ、先づ、掃溜に鶴といや、辰の口にお絹さんだ。お給仕をしながら一寸嬌態でもされた日にやあ、旦那方の前ですが、世の中は好色が多いからね。いゝえさ、かく申す手前だつて、へむ、」と言つてニタリ。親仁は介抱しつゝ苦い顔をして、

「何を言やあがる。」
「まあ、聞きねえ。處が此のお客様ばかりは何と言ふお聲懸りもなしで。」
「君、申譯ではないんです。」と旅客は微笑みつゝ、予にいつた。
打解けて慇懃に、
「何ういたしまして。喜造、それから。」
「翌日は疾く發つからとおつしやつて、尤も遠路でがすよ、これから東京へ行らつしやるんださうだからね、」
「それは、それは。」と親仁は少い人の顔を見る。
「其まゝ床へお入んなすつたと思ひねえ。一度床を數いて居なくなつた先刻の給仕の美婦だ。此のお絹さんさ。又お客様の處へ遣つて來て、枕頭へ坐つての、お火は、なんてツて極の惡さうによ、〰〰ルビ》め。」ちくしやう〰
「まあ可いよ、喜造。然うすると、」
「お客様がね、若旦那。」
「おい、其旦那様は此處に在らつしやるんだよ、嘘をついちやあ不可よ。」
「大丈夫です。」と旅客は先んじて笑つて謂つた。

喜造は語を繼ぎ、

「最う可いから彼方へおいで、とおつしやつたとね。其切、向うを向いてお寝なすつたんださうです。惡寒くはあるし、この雪だもの。昨日から催してまさ、天氣も憂慮なり、遠路を抱へていらつしやるお少い方にやあ、こりや心配で眠られますまい、喃、父さん、御無理はねえ。

處で、温泉へ入つて温まつて來よう。而したら寝られようと、恁うまあお思ひなすつて、寝衣のまゝ廊下へおいでなすつた。大分晩晩いしの、何うして雪が降る時分にや夜中裏山から猿が來て、行水をしようといふ温泉だものを。彼の三階建の恐しい、廣い松屋が寝静まつて、廊下の火と言やあ湯殿の前の洋燈一個。

其處等をの、父さん、ひよろ／＼と歩行いて居るのがあつてよ、お客様の跫音を聞くと、裏階子の蔭へ消えた奴さ。え、氣障ぢやあねえか。猿ぢやあねえ。蝙蝠の化たのぢやあねえ。之が玄達。面の蒼い、痩せツこけたの、ほれ幽靈が大蒜を啖つたといふ風で口の臭い、何うだらう。

一寸見たばかりでも厭な、厭な心持におなんなすつたとよ。それから何心なく一風呂お浴びなすつて、上つて、寝衣を召して、可いかい、ひよいと御覽なさるとお前、お座敷の障子の前で今の坊主と先刻の女と、縺れ合つたり、解れたりよ、搦んで居らあ。

透かして見て在らつしやると、坊主は座敷の中へ推入れようとする、此女が其を曲つてる様子。暫時すると、彼極道、女の身體を撫下ろして太股を探りあてやがつて、捻り上げた。苦痛！

と殺されるやうな聲で、お前、泣くかとしたら、何うだい、首筋を抱いて動かさないで、兩方の拇指で、口を割つて、畜生、鮹のやうな口からお孃さんの口へ臭え息を吹込みやあがつた。えゝ、恐しい、私あ話すにさへ唾が走しる。ねえ、若旦那、玄達が口をつけた杯は、受けると其の臭氣が手に移るといふんですぜ。尤も口を吸つたんだか、何だか、お分りにやならないんだけれど、私が承つてお話をするんですから申すんで、彼は名高いんでさ、いくら折檻をしても、痛いや、苦しいぢやあお絹さんが言ふ事を肯かないと、口を割つて件の息を吹込んぢやあ、

些と我の毒を入れてやらう、賣の能くなるお禁厭だつて吐すんで、皆知つてます。さあ、之を啖つたが最後、彼の女が往生をするんです。其時も其所為か、悄々座敷へ入ると、坊主はひよいと背後へ退いて、ひよろ／＼と廊下の隅へ見えなくなつたさうでがす。

お客様は大抵様子がお分んなすつたから、座敷へお歸んなすつて、突伏して泣いて居るお絹さんに、可いから、此方へ、と言つて、床へ入れて、長襦袢一枚の身體を半分向うへ出して固くなつてるは可いが、肩なんざ、氷のやうだから、可哀相に、何うもしやあしない、暖に寝かして遣らうと、嬰兒のやうにお抱きなすつた。

「實に恐縮。」とばかり自ら嘲るが如くに言つて、旅客は莞爾として、外套の解けた中に、濡れしをれた衣の上から、お絹の胸に手を載せた。呼吸は未だ返さぬが、幽に震へたと思ふと、左の膝を上げて、雪のやうな足を縮めた。

「御奇特でござります。いや、其お志ばかりでも別條はござりませぬてや。」

「其上坊主めに見せるだけ金子はお遣しなすつた

つて。飛んでもねえ、御災難だつたけれども、此女は其お心に感じたと見えて、辰の口で以て、私が知らないことなんですから、此奴あお釋迦様でも御存じなからうと言ふことを、寝物語に明したんで。

實はね、言交した男があるんですとさ。　ー

私は何、些とも何事も分らねえんで、昨夜金澤から歸りの松屋の番頭さんを乗せて行つたでせう。丁ど此のお客様がお發程になるから、大聖寺までの極でお送り申したら可からう、宿場で繼交る分は構はねえつて、女房さんが言つてくれますもんだから、願つたり叶つたりで、今朝お乗せ申して遣つて來たんですが、辰の口を出る時はほんのちら／＼だつたのが、開發を越える頃からどつと渦を卷いて來たでせう、目も口も開くんぢやありませんや。纔一里半と言ふのを、漸今しがた、ついこの辻堂の所まで參りますと、田圃道を、何と、前へ廻つて、吹雪に投戻されたやうに、ばつたり。楫を持つてた私の手へ喰ひつきさうにして、留めたのがお絹さんだ。驚いたぢやありませんか。此通素跣足で散髪。定めし背後から呼んだんだらうけれども、人の聲なんぞ聞える

やうな平穏いんぢやねえ。セツ／／いつて旦那様に一目と言ふから顔をお出しなさるとね、父さん、お手に取りついて、自分が緊乎握つてた、洋服の釦を一個お渡し申してさ、

（あの昨夜おら話し申しました私の旦那様から頂いた記念です。肌身を放さないで持つて居ましたが、貴下の御深切につけても、今までのお客のことも思はれます。御覧のやうなわけですから、迚も操は守り切れません。絹は死んだと思つて下さいましとおつしやつて、此品をおことづかり下さいまし。）とよ。然ういつてお前、お頼み申したんだがな、お受取なすつて未だ何ともおつしやらないのに、眞蒼になつて反返つた。取敢ず辻堂へ抱へ込んで、お手傳をして介抱はして見たが、火の氣がなくツちやあはじまらねえから、其處で、因縁を承りながら支度をして連れて來たわけよ。若旦那、お客様はお歩行でございましたぜ。」

予は差俯向いて居た。返事もよくせず、唯助けたい此女を、頼むのは叔母である、が、ともかくも、

「何にも申しません。が、そして、其釦はおことづかりなさいますか。」

旅客は慎重に頷いて、

「誰にも謂はないと言ひましたツけ。男の名を聞くと信友です、殊におなじ學校に居るんですから託りませう。何、丁度胸の處の釦ださうで、これを放しちやあ、此の婦人の魂を奪ふやうなもんですから、其まゝ持つて居るやうに、諭さうかとも思つたんですが、然し、境遇で操が守られないと言つて返す。珍しい心意氣ですから、故とお預りしませう。私は急ぎますから此まゝ失禮しますが、あとで、私が世に出て、救けて遣ることが出來る時まで、其男には黙つて確と預つて置かうも知れぬ。何しろ身體を大切にと、貴下言つてやつて下さい、ーー　それぢやあ、……姉さん、もう行くよ。」と言つて、旅客は胸に置いた手を引いた。女は夢中ながら、其の手を追ふが如く、玉のやうな腕を上げた。炎尖は〓と立つて、片頬に血の色が浮んで見えた。

親仁が、

「占めたぞ。」と言ふまゝに、茶店の親子と予等兩人。

「姉さん、」

「お絹さん、お絹さん。」

女は唇を結んだまゝ、眉を顰めたまゝ、聲も微に應じたのである。

「あゝい。」

【完】